

平成30年 2 月 23 日

浜田市議会議長 川神 裕司 様

議員名 三浦 大紀



## 調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため研修等を行ったので、その結果を報告します。

### 記

1. 期 間

平成30年1月18日(木)～19日(金)

2. 調査研修内容

地域プロデューサーを核とした、官民協働による多角的なアプローチを神奈川県大磯町・茅ヶ崎市を例に学ぶ

案内人：原 大祐(西湘を遊ぶ会代表) 他

内容：空き家の活用、地域と関わるキャリア教育、

地域一体型の保育施設、観光交流の拠点づくり など

3. 研 修 先

- ・つきやま、OISO1668・・・空き家の活用
- ・星槎学園・・・地域と関わるキャリア教育
- ・こびとのこや・・・地域一体型の保育施設
- ・熊澤酒造・・・観光交流の拠点づくり

4. 調査経費

12,615円

(経費内訳 東京～大磯 往復交通費、宿泊費)

交通費(移動費) 2,280円

宿泊代 10,335円

5. 調査研究活動の概要

別紙のとおり



## 【調査研究活動の概要】

### ●研修テーマ

地域プロデューサーを核とした、官民協働による多角的なアプローチを神奈川県大磯町・茅ヶ崎市を例に学ぶ

### ●訪問先・訪問者

<18日>

- ①町内散策@つきやま、Lee's Bread など
- ②大磯での取り組み概要についてのレクチャー@oiso1668、こびとのこや
  - ▶NPO 法人 西湘をあそぶ会 代表 原大祐
  - ▶大磯町産業観光課 磯崎清彦
  - ▶NPO 法人もあなキッズ自然楽校 理事長 関山隆一
- ③星槎学園の学校の魅力化についてのレクチャーと現地視察@星槎学園
  - ▶星槎湘南大磯総合型スポーツクラブ クラブ長 大森西三郎

<19日>

- ④人が集まる場所づくりについてのレクチャーと現地視察@熊澤酒造
  - ▶熊澤酒造 代表取締役 熊澤茂吉

### ●レポート・メモ

- ①町内散策@つきやま、Lee's Bread など

つきやまは、大磯市（大磯町で月に一度開かれているマーケット。詳細は事項にて。）の参加作家で営むセレクトショップ。ギャラリーや活版印刷スペースもある。11人の作家と4人のスタッフが店番・企画運営を行っており、工房、デザイン事務所（2名）としての機能も持った地域の「モノづくり」の基地的役割を果たしている。

また、道を挟んだ向かい側にある、Lee's Bread も、同じく大磯市の出店者から実店舗をもつに至っている。看板も出ていないが、終始客が出入りしていた。地元商工会会頭から管理を任された原さんが出店者に声がけをし、極力自分たちで直しながら場所を作っている。デザイン性も高い。



Lee's Bread



つきやま

②大磯での取り組み概要についてのレクチャー@oiso1668、こびとのこや

▶ NPO 法人 西湘をあそぶ会 代表 原大祐

「大磯での取り組み概要」

「大磯市を核としたまちづくりの手法」

キーワードメモ：

- ・郊外の地方化に直面している。これをあまり認識していないのが問題
- ・港を核にして住民の生活がどうよくなるかを考えている
- ・くらしの質を高める方向性でのまちづくりを実践
- ・地元住民の為にならない観光はいらない（成功しない）
- ・地域性（特徴あるエリア）が大切
- ・そのためには一次産業が元気であることが重要
- ・大磯市 30代、60代が多い
- ・遊漁船（釣り船）がほとんど
- ・郊外：依存、均質化、標準語 地方：自立、個性、方言
- ・×お店が増える ○良いお店（人）が増える
- ・漁協直営の食堂オープン→盛り上げるために朝市開始（協議会を実行委員会に移行）
- ・役場はアドバイザーに徹する
- ・港をチャレンジの場に、大磯全体を市に見立てる
- ・ローカル、インディペンデント（個人）、ハンドメイドが出店審査基準
- ・生き残るためには、高付加価値
- ・定期的にやっていることがコミュニティの醸成に役立っている
- ・初期費用1万円（HP制作の経費）、広告宣伝費程度で立ち上げた大磯市（低コストスタート）
- ・メディア（大磯新聞）で、出展者のストーリーを伝える活動を行う
- ・点を面に、エリアに価値を
- ・当初港だけだったエリア設定をまち全体にした
- ・運営事業者が建物プランを提案、行政が建設する PPP 事業
- ・場作りの専門家を巻き込んで設計（CAFÉ : community access for everyone）
- ・大磯町における9つの価値観を定義し、それを体現する施設にしていく
- ・農業は三次産業で再生させる
- ・地元高校と一緒に、地産の人材育成を行なっている
- ・共通の話題をつくるのが大切＝大磯の場合は大磯市
- ・行政主導でやるとうまくいかない→民間で動く人をうまく見つけることが大事

▶大磯町産業観光課 磯崎清彦

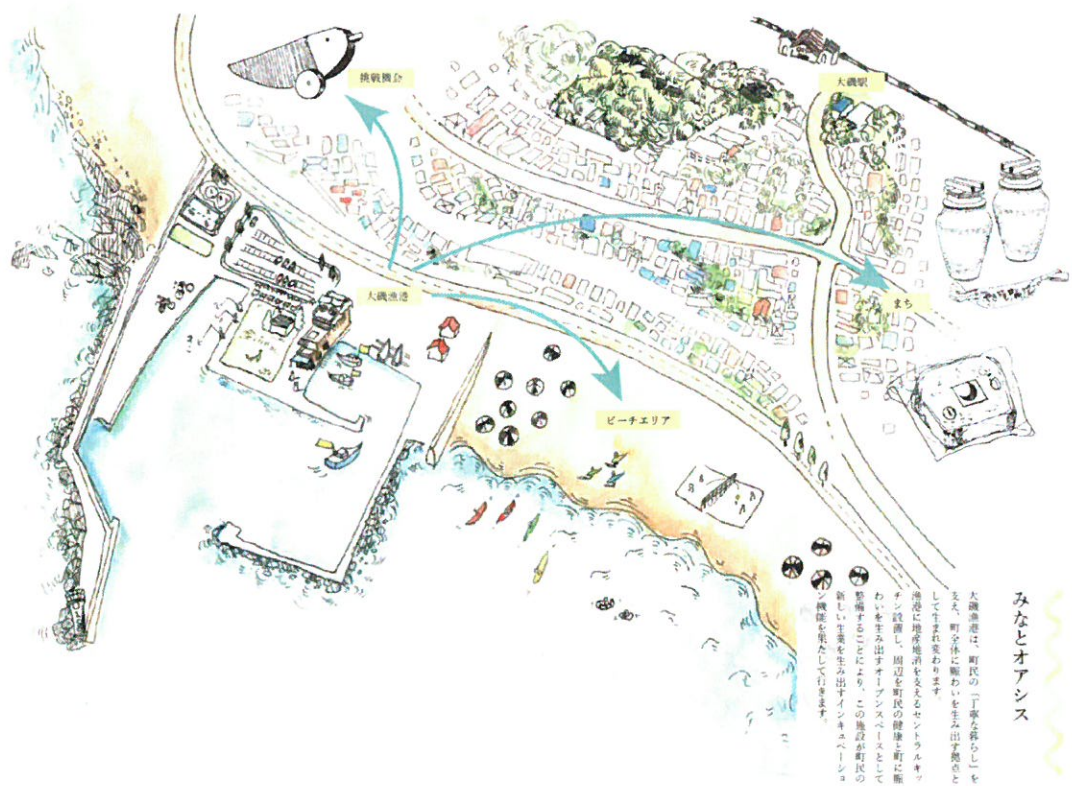
「大磯町の観光ビジョン」

キーワードメモ：

- ・インバウンドにも力入れているが、そういう場所へは大型バスで来て帰るだけ

=地域との関わりが少ないというものが多い

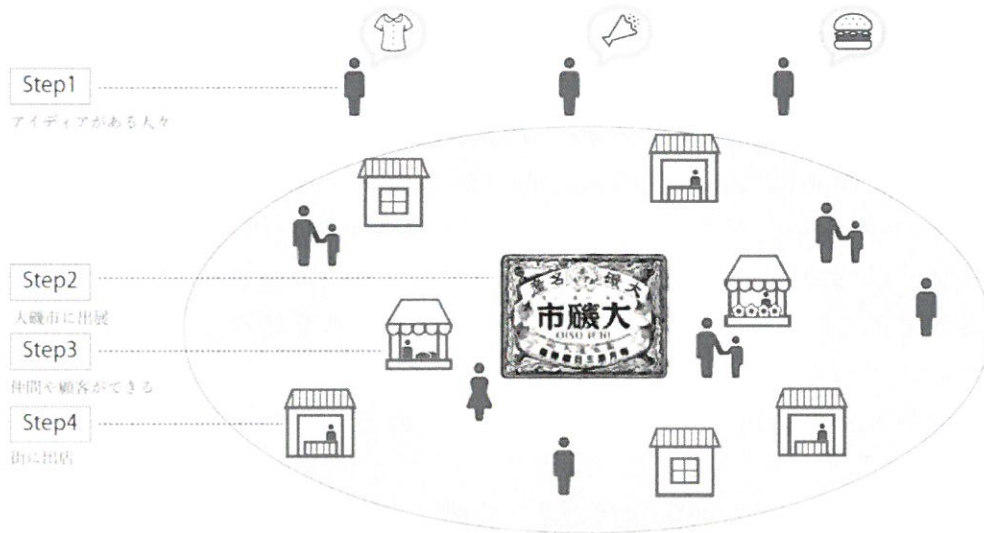
- ・大磯ブランド戦略部会→京都や鎌倉のような場所は目指さないと共有
- ・3年かけて大磯の観光の方向性を打ち出した
- ・ローカルな環境を崩さないまま、地域住民が町の資源を楽しむ。まちに関わりながら町を好きになってもらう。→定住促進
- ・地域づくりにつなげるための手段としての観光をやっていく
- ・大磯の価値を9つにまとめた(しばった)→全戸配布プラス外部に配布
- ・大磯市はオブザーバーとして参加。イベントコンテンツをつまらなくさせる可能性が大きい(行政と切り離している)
- ・町民自らが楽しんでやっていることが大事
- ・一番大事なことは大磯を大好きという人が増えること
- ・同じ意識で全町民とやっていきたい



みなとオアシス構想

# インキュベーション

-まち全体を「市」に



(図) 大磯市を通して街に賑わいが創出されるプロセス

▶NPO 法人もあなキッズ自然楽校 理事長 関山隆一 氏  
もあな こびとのこやの取り組み

キーワードメモ：

- ・ 野外保育認証制度が国内でもいくつか事例ができてきた
  - ・ 急速に自然保育・野外保育が増えてきた
  - ・ ビジョンが大事（どんな教育をしていくか）
  - ・ まち全体を保育の資源にしたい（まるごと使いましょう）
- 園庭はない、まち全体が遊び場という捉え方
- ・ 認証保育施設は直接契約できる（手法に理解してくれる人が入園してくれる）



原氏のレクチャーの様子



関山氏のレクチャーの様子

③星槎学園の学校の魅力化についてのレクチャーと現地視察@星槎国際高等学校  
湘南学習センター視察研修

▶星槎湘南大磯総合型スポーツクラブ クラブ長 大森西三郎 氏

▶星槎グループ副本部長 角木孝生 氏

「キャリア教育における地域連携」

「Jリーグのキャリア教育メソッド」

キーワードメモ：

- ・グローバル人材の育成
- ・通信制の強みを活かす（スポーツは体育の時間として実施）
- ・原さんを仲介役に、地域の人たち（様々なキャリア）に触れる授業を実施
- ・Jリーグが用いているキャリア教育のメソッドを活用（サッカーにまつわる、プレーヤー以外の職種などを紹介）
- ・課外授業を通じて、怒る（指導する）チャンスを増やしている
- ・プレー中もくらしの中でも同じこと
- ・総合型の介護予防事業との組み合わせで運営



校内見学の様子



校内に飾られた表彰状など

<19日>

④人が集まる場所づくりについてのレクチャーと現地視察@熊澤酒造

▶熊澤酒造 代表取締役 熊澤茂吉

・施設案内&企業主導型保育

- ・2～3年ごとに施設を徐々にアップデートした。最初から全体構想があったわけではない＝社会のニーズに合わせてやすい（新鮮さを残す）
- ・変化があると、来た人がまた別の人と来たいと思ってくれる（ちょっとずつの変化を楽しんでもらう）
- ・古民家は固定資産税評価額が低いので相続税対策（日本の法律は有利）
- ・保育園は社員からのリクエストではない。意見をきいても何も出てこない。つくればつかう、そういうもの。
- ・地元の人にいかにつかってもらうかが最重要

- ・観光バスが入って来ない方が「事業として安全」
- ・地元の人が集まっているところへいきたいという真理＝観光の考え方
- ・従業員の対応の変化が生まれる
  - 対 観光客・・・一度しかこない
  - 対 住民・・・日常的につかう→数字はすぐにでにくいが廃れるのも遅い
- ・おみやげ屋とは違う
- ・シビックプライドを醸成する場所としての場作り
- ・Q：地元が好きですか？ A：我が家は500年ここに住んでいる。好きとか嫌いとかでは無いと思う。



入り口



熊澤氏からのレクチャー



レストランの様子



近隣の農家が敷地内で出店

### 【所感】

神奈川県西部に位置する大磯町は、「郊外から地方へ」という社会構造の変化の中で、浜田市をはじめとする地方と同じような課題を抱えていた。しかし、彼らにとって、地方というくくりのほうが、独自性が打ち出しやすくなって、一層街の方向性を決めるときに良い方へ働いたというところにもヒントも得た。やはり、地域の特異性をどの部分に見出し、磨いていくかが重要である。

特に、浜田市として参考にすべきは、「港を核にして住民の生活の質をどう高めるか」という考え方だ。大磯は浜田と同様に港があり、そこで毎月開催される大磯市というマーケットは、一次産業の活性化だけでなく、町の賑わいを支える生

業の担い手発掘や子育てやキャリア教育のフィールドとしても活用されていた。港オアシスのエリアを広域に定義しなおして、街に港が溶け込んでいた。

明確な機能を港にもたせていることも、わかりやすく、そのためにやることも明確だ。

- ①マーケットをトライ＆エラーの場所にして人材発掘と育成を行い、
- ②港をセントラルキッチンにして新鮮な食を提供し、
- ③周辺エリアはオープンスペースとして、市民の健康増進をはかる「見立て」が非常にうまく、これも参考にしたい。

観光振興の考え方（ビジョン）にも共感するところが多かった。

- ・西湘を遊ぶ会の原さん。  
「ローカル・ファースト」
- ・大磯町観光課の磯崎さん。  
「観光は、地域づくりにつなげるための手段」
- ・熊澤酒造の茂吉さん。  
「地元の人にいかにつかってもらうか」

観光は、交流人口をどれだけ生むか・生んだかという部分で議論されがちであるが、域内の活動人口をどれだけ生むか・生んだかというところに主たる目的がおかれている。地元で愛されて、はじめて観光コンテンツになる。暮らしそのものを観光にするという考え方を推進したい。観光は「お裾分け」的感覚からよいものが生まれると考える。

市民それぞれが、友人をつれていきたいと思うような場所が少しずつ増えていくような変化を生み出したい。その小さな変化を見逃さず、バックアップするのが行政の役割である。

また、このような地域づくりを行う中で、地元の学校や保育園が、積極的にまちと関わろうとする姿勢も、大磯町においては特筆すべき点である。ここにも見立ての視点があり、学校においては、「地域活動も部活動の延長であり、指導する場時間を増やしている」という考え方。保育園においては、「まちの自然（海）が園庭」という考え方。ある資源を生かし、効果を最大化していくアイデアと具体的なアプローチも参考になった。

以上、「ビジョンと事業づくりの連動性」について、大変参考になる研修であった。また、まちづくりにおいて、地域のコーディネーター（今回の場合は、原大祐さん）の存在があるかないかがかなり大きいことも再認識した。官民協働・相互依存のまちづくりが必要である。